「心のたすきをつなぐ」

大介は、小さいころから走ることが大好きだった。中学校では陸上部に入り、練習を重ねていった。自己記録をこう新するたびにますますやる気になり、練習にも力が入った。

大介の住んでいる町には、駅伝で有名な世羅高校がある。これまで何度も全国大会に出場し、何度も優勝をしたことがある。

「自分も、高校生になったら全国高校駅伝に出て、(1)京都の町を走ってみたい。」

と思うようになった。

高校に進むとき、大介は迷わず世羅高校を選び、陸上部に入った。

高校に入ってから大介は、「全国大会に出る。」という目標に向かい、一生懸命練習にはげんだ。世羅高校の陸上部には、同じ目標に向かってがんばっている仲間がたくさんいた。仲間達ががんばっているすがたを見ると、「自分もがんばるぞ、負けるもんか」とやる気がわいてきた。

三年生になった。大介は、広島県予選に選手として走ることになった。大介は、全力で走り、(2)区間賞をとることができた。チームも大会新記録で優勝し、全国大会への切ぷを手に入れることができた。

この調子で行くと全国大会でも走ることができるかもしれない。大介のむねは期待でふくらんだ。

全国大会が近づくにつれ、監督は、

「優勝しよう、今年は勝ちに行く。」

と言われるようになった。

「選手になってもならなくても一人一人が目標を持ち、強い気持ちで練習をしなければ、優勝はねらえない。」

とも言われた。勝ちたい思いは大介も同じだった。

「先ぱいたちができなかった優勝。自分たちが三年生になったときに必ず優勝する。」

仲間達と、いつも話してきたことだった。

いよいよ、メンバーの発表の日がやってきた。大介は、期待と不安の中、自分の名前がよばれるのを待った。だが、メンバーの中には大介の名前はなかった。大介は、補欠として走る準備をしながらも、五区の選手のサポートにまわることになった。

「陸上部員全員で優勝を勝ち取ろう。一人一人、何ができるかをよく考えてくれ。」

監督の声が、どこか遠くから聞こえてくるような気がした。大介は、監督の言葉を聞きながら、こぼれてきそうな涙をぐっとこらえた。

次の日もいつも通り練習があった。練習しなければいけないことは分かっているのに、足が前へ進

まなかった。

「練習しても、全国大会で走れないのに・・・。」

大介は、グラウンドに立ち、仲間達が練習しているのを見つめていた。その時、選手の一人が通りがかりに大介のかたをぽんとたたいた。

「大介、ありがとう。」

思いがけない言葉だった。「いっしょに練習しているだけなのに、自分が役に立っているのか？」

大介はとまどった。

「そういえば・・・・・。」

大介は、広島県予選の時のことを思い出した。

予選の日は雨だった。コンディションの悪い中走るのは大変だったが、それほど心配はしていなかった。サポート役の仲間が、大介達選手が安心して走れるように、大会コースの下見に行き、実際に走り、道路の状態や走りやすいコースを教えてくれていたからだった。その上、雨の中、大介の荷物の運ぱんや飲み物の準備、天候や風向きの確認をしてくれた。いつもそばにつきそってくれ、心強く感じていた。

そのおかげで、大介は、たすきをつなぐことだけを考え、走ることに専念することができた。

「ぼくが走る時、いつも仲間がいてくれたんだ・・・・・。」

「大介。」

名前をよばれてふり返ると、仲間の一人がにこにこしながら立っていた。かれもまた、選手になれなかった一人だった。

「もう練習は始まっているぞ。みんなが待っているから、早く行こう。優勝するんだろう。」

「それは分かるけど、おまえはくやしくないのかい。もう、たすきをつなげないんだぞ。」

「何言ってんだよ、ぼく達だって、ちゃんとたすきをつないでいるじゃないか。」

そう言うと、あたりまえのように、練習している仲間達のところへもどって行った。

「ぼく達もたすきをつないでいる・・・・・・そうか！」

大介は、大きくうなずくと、はずむような足どりで仲間達の方へ走って行った。

平成二十一年十二月二十日、全国高校駅伝競走大会で、世羅高校は六度目の優勝を果たす。大介は、選手としての準備をしながらも、五区の選手のサポートにまわった。コースの下見を行い、選手の荷物を持ち、レース前にはげました。

大会が終わった後、歓声にわく競技場で、大介は、こうインタビューに答えている。

「自分が走ることより、チームが優勝することの方がうれしいです。」

大介の心からの思いだった。

翌日。優勝の歓喜にわく世羅の町で、優勝パレードが行われた。パレードの先頭のオープンカーで、優勝旗をほこらしげに持つ大介のすがたがあった。

【注】

(1)一九五〇年から始まった大会で、一九六六年から 現在の都大路（京都）が舞台となった。

(2)各区間を最も速いタイムで走ったランナーに与えられる賞。（※男子は七区間）

【参考文献】

月刊陸上競技（二〇一〇）二月号　講談社

陸上競技マガジン（二〇一〇）月号　ベースボールマガジン社

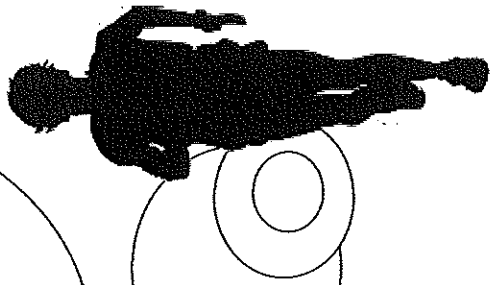
中国新聞　平成二十一年十二月二十一日付

心のたすきをつなぐ

名前（　　）

「ぼくたちもたすきをつないでいる・・・・・そうか！」
大介は、大きくうなずくと、はずむような足どりで仲間達の方へ走って行った。

大介は、はずむような足どりで仲間たちの方へ走って行きながら、どんなことを考えていたでしょう。



スポーツ　「心のたすきをつなぐ」

〔小学校高学年　主題：集団の役割と責任の自覚　内容項目：4の（3）〕

授業展開例　－学習指導案（略案）－

（ア）主題名　役割と責任の自覚　4－（3）：小学校高学年

（イ）ねらい　全国高校駅伝大会に出ることを目標に努力をしてきた大介が，チームの優勝のためにがんばろうと決意したときの気持ちを考えることを通して，集団の一員としての自分の役割を自覚し，集団の向上のために頑張ろうとする心情を育てる。

（ウ）資料名　「心のたすきをつなぐ」

（エ）学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 （☆評価の観点）
導入	1　たすきを見て，知っていることを話し合う。	○　何に使うものでしょう。 ・駅伝のたすきだ。 ・選手がつないでいくものだ。 ○　たすきをつないでいる映像を見る。	○　たすきのもつ意味，たすきをつないでいくことの大変さを感じ取らせる。
展開	2　資料を読んで考える。	○　「監督の言葉を思い出しながら，こぼれてきそうな涙をぐっとこらえた大介」は，どんな気持ちだったでしょう。 ・一生懸命練習をしてきたのに。 ・ぼくは走れないけど，優勝したい。 ・走れないぼくに何ができるのだろう。 ○　自分が選手として走った時のことを思い出した大介はどんなことを考えたでしょう。 ・仲間たちがいつもそばにいてくれて安心して走れた。 ・サポートしてくれる仲間がいたからたすきをつなぐことができた。 ◎　大介は，仲間たちの方へはずむように走って行きながらどんなことを思っていたでしょう。 ・サポートとしてのたすきをつないでいこう。 ・ぼくも仲間の一人なんだ，優勝に向けてがんばろう。 ・みんなと一緒に練習することで，チームが優勝できるかもしれない。	○　「たすきをつなぐ」意味を考えさせるために，資料名は最後に提示する。 ○　「選手になってもならなくても」という監督の言葉に目を向け，チームの一員としての在り方についても考えさせる。 ○　ペアで考えを交流する。 ○　仲間たちがともに練習し，支えてくれたおかげで走ることができていたことに気付かせる。 ○　「走らなくてもたすきをつないでいる」とは，何を指しているのか考えさせる。 ○　ワークシートに考えを書かせ，交流する。 ○　価値ごとに整理し，意図的指名を行う。 ☆　書く活動を通して，「たすきをつなぐ」と言う意味を自分なりにとらえ，チームの一員として前向きに自らの役割を果たそうという大介の考えを推し量ることができたか。
	3　自分の生活を振り返る。	○　あなたが，集団の一員としてがんばっていることは何ですか。 ・スポ少の野球で，試合には出られないけど，声をしっかり出して雰囲気作りをしている。	○　事前に児童からアンケートをとっておき，それを紹介する。 ○　みんなをまとめたり，助けたりしていることを中心に出させる。
終末	4　メッセージを聞く。	○　大介君からのメッセージを聞きましょう。 ・大介は，サポートを自分の役割としてがんばったから，優勝してうれしいと思ったんだ。 ・陸上部全員が心を一つにして頑張ったから優勝することができたんだ。	○　全国大会後の満足感を伝え，一人一人が集団の一員としてがんばることが優勝という結果につながったことを感じ取らせる。

【参考資料】　小・中学校学習指導要領解説道徳編「第３章　道徳の内容」

４　主として集団や社会とのかかわりに関すること

【第５学年及び第６学年】

(3)　身近な集団に進んで参加し，自分の役割を自覚し，協力して主体的に責任を果たす。

集団と個のかかわりの基本を述べたものであり，身近な集団の中で自分の役割と責任を主体的に果たす児童を育てようとする内容項目である。

人間は社会的な存在であり，家族や学校をはじめとする様々な集団や社会に属して生活を営んでいる。それらにおける集団と個の関係は，集団の中で一人一人が尊重され生かされながら，主体的な参加と協力の下に集団全体が成り立ち，その向上が図られるものでなければならない。そのためには，集団に属する一人一人が，集団の活動に積極的に参加し，集団の意義に気付き，その中での自分の位置や役割を自覚して責任を果たすとともに，主体的に協力して全体の向上に役立とうとする態度をもつことが重要である。なかでも小学校段階では，集団のまとまりを意識し，集団への所属感を高めていくことができるようにすることが求められる。そのためにも，一緒に活動する楽しさや，集団の役に立つ喜びを感じとらせながら，主体的な活動への意欲を高めることが大切である。なお，このような態度は，第３・４学年の段階においても，例えば，進んでみんなのために働くことなどに関する指導を通じてはぐくまれている。

この段階においては，身近な集団をまとまりのあるものとしてとらえ，いくつかの集団に属しながら，それぞれの目標に合わせて活動することができることから，学校や地域の中でも，学級集団，児童会やクラブなどの異年齢集団，遊び仲間や各種少年団体などの身近な集団において，自分の立場や全体の動きを自覚できる活動に主体的，積極的に参加できるようにしていく必要がある。それらを通して自分の役割と責任を果たすとともに，成員相互のかかわりの大切さや，協力して目標を達成することのよさに気付くことができるよう指導することが大切である。

4　主として集団や社会とのかかわりに関すること

【中学校】

(4)　自己が属する様々な集団の意義についての理解を深め，役割と責任を自覚し集団生活の向上に努める。

人間は，一人では生きていけない。様々な集団や社会の一員として生活を営んでいる。それぞれ目標や立場を異にする集団に属しながら，共同で日々の生活を営んでいる。人が，集団の一員としてよりよく生きていくためには，自分の属する集団の意義を十分に理解することが大切である。各人がその成員としての役割と責任を自覚して，個々が責任を果たし集団の目標を達成する中で集団生活の向上が図られ，自己の実現もなされる。また，集団は成員相互の協力があって維持されるものであるから，互いに人間関係を大切にするとともに，励まし合うという協力関係をつくりあげていくことが大切である。

中学生の時期は，学級，学校，地域社会などの様々な集団の中で互いに深くかかわり合って相互理解を深め，それぞれの集団の中で人間的な成長を遂げるのによい時期であるが，一方で，集団の一員としての所属感や一体感を強く求め，自己の思いのみを先行させてしまうこともある。集団生活の向上には，集団の規律を守ることが必要であり，そのためには生徒一人一人が自らの役割と責任を果たすという自覚が大切である。集団の中では，成員同士が互いに規律を守り，協力し合って，集団生活の向上に努めることが求められている。

指導に当たっては，自分が所属する集団にのみ目が向き過ぎると，自分たちの利益のみを追求し，自分とかかわりが薄いと思われる集団や成員に無関心であるばかりか，排他的になりかねない。このような利己心や狭い仲間意識を克服し，協力し合って集団生活の向上に努める態度を育てることに留意する必要がある。更に，生徒一人一人が集団の中で個性を失うことがないように留意して，それぞれが伸び伸びと自らのよさを発揮できるような集団の在り方を考えられるようにする必要がある。